2023年9月の選評に代えて　　高橋修宏

どちらでもないに丸して夏休み　　（音無　早矢　埼玉県）

〇か×か、好きか嫌いか、是か非か、男か女か。つねに答えることを求めながらも、そんな二分法に収まらないことの方が身の回りには多い。「どちらでもない」という曖昧さが、「夏休み」という豊かな未知の時間と響きあう。

ゆくゆくは未完成になる国家　　（合川秋穂　東京都）

これまでの歴史過程を見ても、さまざまな「国家」形態があったように、けっして「国家」は絶対不変の存在ではない。いま完成されたように見えたとしても、どこまでも未完成のままであり、「ゆくゆくは」未完成であることが、一気に（あるいは序々に）露呈してゆくのではなかろうか。

背骨からプラハまでの距離を測る　　（まちりこ　埼玉県）

何より「背骨」という人間の骨格を支える身体的な部位が、距離を測るための基点となっていることがユニーク、新鮮だ。距離を測ることへのアイロニーも含んでいよう。またプラハという、一般的にはイメージしにくい都市名も効果的。

ホームステイ　　（氷丸　茨城県）
手を振っている兄弟は
火山の影に小さくとけた

ここで記されているのは、「ホームステイ」の際の別れのシーンなのか。しかし、今年のハワイの火山噴火を背景に置いてみると、「ホームステイ」をめぐる光景が現実の災厄によって暗転していくようである。はたして「手を振っている兄弟」は、無事なのだろうか。

蚕ふしふしふしと不死噛み砕く　　（杢いう子　佐賀県）

「ふしふしふし」という表記が、貪欲にクワの葉を食する蚕の咀嚼音を呼び出しながら「不死」へと着地してゆく。言葉の音の面白さに着目したユニークな一句。

おむすびのラップどこから青葉風　　（吉沢　美香　宮城県）

「おむすびのラップ」を剥すときに、さやかな「青葉風」に気づいたのだろうか。「青葉風」という季語によって、明るい初夏のピクニックや農作業の光景が見えてくるようだ。

羽化、　　（こはくいろ　大阪府）
ひらがなのように
ほどけた
ひかりと生きて

「羽化」という漢字が提示されたあと、「ひ」、「ほ」、「ひ」というハ行のひらがなの連なりが巧み。「羽化」という生命をめぐる言葉のもつテクスチャー（質感）が立ち上がるようだ。

花の匂いに誘われて　　（香取小春　宮崎県）
やってきた
たくさんの
古代の巨大潜水艦

この「古代の巨大潜水艦」とは、連綿と古代から変わらない何らかの水生生物（亀とか、鰐とか…）の比喩なのかもしれない。しかし、文字通り「古代の巨大潜水艦」と受け取ったほうが、さまざまに不思議な想像が広がってゆく。

天の川 森に墓石の廃棄場　　（玻璃　愛媛県）

「墓石の廃棄場」からは、もはや御参りする人がいなくなった墓のイメージが伝わってくる。どこか不穏な気配を秘めながらも、やがて訪れる未来の風景か。さえざえとして「天の川」が効いている。

出来ないが口癖の子に繰り返し　　（貴田　雄介　熊本県）
出来ているよと囁きかける

とてもヒューマンな眼差しの作品。ほんのささやかな「出来てるよ」であっても、その「出来てるよ」によって人は自信や勇気を得ることがあるのだから ── 。

夕暮れの小さな本屋になりたい　　（詩央えみる　大阪府）
あなたが来たらほうっと灯る

「夕暮れの小さな本屋」というイメージが、どこか淋しく、懐しい。そんな「小さな本屋」が、今日もどこかで「あなた」を待っていると思うだけで、少し世界が美しく見えてくる。

貝殻を宿に選んだ小さき海　　（花野　木春　東京都）
標本箱で揺れてさざめく

この作品の主体は「小さな海」。標本となった「貝殻」の一つひとつには、そんな「小さな海」が「揺れてさざめく」のだ。ちょっと「貝殻」の標本を見る目が変わるような機知に富んだ作品。

ほんとうは知ってたよ　　（雲理そら　大阪府）
きみの腕の ちだまりの意味も
あさやけの活字も

どこか「きみ」をめぐる自傷や虐待、孤独の深さがほのめかされながらも、それ以上に語られることはない。「ほんとうは知ってたよ」と語る主体は、ただ「きみ」を優しく、温かく、そして悲しげに見つめているのか、慈悲のように ── 。